

「イタリアの風景」としての日本 - 歴史、文化、地形的な視点から

ローマ日本文化会館の館長の高須奈緒美です。昨年 9 月 20 日に巨大な段ボール 10 箱を抱えてフィウミチーノ空港に到着してから、早いもので 1 年余りが過ぎました。今回の発表では、イタリアにおいて 50 年以上にわたって日伊文化交流の拠点として活動してきたローマ日本文化会館が、どのように求められ導入され、定着したか、またイタリアにおける「日本文化という風景」は 80 年代以降どう発展し、今後どのように創造的に継承されていくのか、という視点から「翻訳」つまり「つなげること、相互作用を起こすこと」という「文化交流の仕掛け」について考えます。

1. ローマ日本文化会館設立に至る歴史的な背景

ローマ日本文化会館は 1962 年、日本政府初の海外の日本文化会館として設立され、1972 年に国際交流基金が設立されてからはその海外拠点の一つとして活動しています。現在国際交流基金は 22 の国に 23 の拠点を持っていますが、日本文化会館はローマ、ケルン、パリの 3 か所で、ケルンは 1969 年、パリは 1997 年設立ですからローマが最古です（パリには 1997 年の開設前から 2001 年まで駐在しました）。いずれもホール、ギャラリー、図書館、教室などを持つ総合文化施設で、文化芸術交流、日本語教育、日本研究・知的交流を 3 つの柱とし、施設内で、また外部関係機関で文化交流事業を展開しています。ローマには日本庭園というほかの文化会館にはない特徴もあり、庭園だけで年間 2 万人が訪れる人気スポットとなっています。

ローマ日本文化会館はボルゲーゼ公園の近く、ヴァレ・ジュリアにあります。ヴァレ・ジュリアは 1911 年に開催されたイタリア万博のローマ会場となった場所で、日本のパビリオンは現在のローマ大学建築学部のあたりに建っていました。和風建築で大変な人気を博し、ずっと残してほしいとの声も多かったと聞きます。

1922 年のムッソリーニの政権掌握後、1935 年前後から各国の文化会館（アカデミー）がヴァレ・ジュリアを中心に次々と設立されました。英国、オーストリア、オランダ、ルーマニア、スウェーデン、ベルギー、エジプトなど、いまでも日本文化会館の 2 階から見晴らすことができます。1934 年から、ヴェネチア国際映画祭も開始されました。

この時期の日伊交流としては、1930 年に Palazzo delle Esposizioni において日本美術展覧会、1942 年に日本においてレオナルド・ダ・ヴィンチ展が開催されていま

す。日本は 1932 年に国際連盟を脱退しますが、その前後から鉄道省国際観光局(1930)、日本学生英語協会(1933)、国際文化振興会(KBS)(1934) - 国際交流基金ができるまでローマ日本文化会館の運営を行っていた団体です - 、日本ペンクラブ、国際学友会(いずれも 1935)などの文化交流団体が次々と発足しました。1938 年には、34 年発足の KBS が、発足間もないヴェネチア国際映画祭に日本映画を出品、同じ 38 年にはフスコ・マラーニが 35 年発足の国際学友会の奨学金で日本に留学しています。ちなみに黒澤明の「羅生門」がヴェネチア国際映画祭でグランプリを受賞するのは戦後の 1951 年のことであり、ヴェネチア・ビエンナーレはすでに 1895 年から実施されていることは、ご存じのとおりです。

戦間期においてローマ日本文化会館設立の動きは中断していましたが、戦後になって 51 年に「羅生門」がヴェネチア映画祭グランプリ受賞、52 年の第 15 回ヴェネチア・ビエンナーレから日本も参加を開始、54 年にはローマ日本文化会館設立に関する日伊文化協定締結・翌年発効となり、60 年着工、62 年竣工となります。

ヴェネチア・ビエンナーレ日本館も同じく国有財産ですが、こちらは会館に先立つこと 6 年前、1956 年にすでに完成していました。吉阪隆正設計のモダンな建物です。ヴェネチア・ビエンナーレは現代美術展と建築展が毎年交互に開催されますが日本館は文化会館同様、現在は国際交流基金がその企画運営にあたっています(76 年から)。今年は建築展の年ですが、1972 年以降に生まれた若手建築家 12 グループによる「縁・アート・オブ・ネクサス」が、グランプリに次ぐ賞である審査員特別賞を受賞しました。政治的なメッセージ性が強いパヴィリオンが多い中、日本館は日常性の中でのさまざまな人々のつながりを、みずみずしい感覚で捉えており、「震災や社会不安、少子高齢化や過疎化、人のつながりの希薄化の中で、人間らしいつながりを作り、大切な記憶を継承するための建築」が現代の文脈の中に、美しく日本らしい形で表現されていると思います。現代の社会的な問題を逆手にとり(例えば増築ではなく「減築」、都会でなく田舎、など)、高いデザイン性と明るい美しさで提示する「次世代性」が、「時代を先取りした日本らしさ」として評価されたのではないかと思います。11 月 27 日まで開催されておりますので、ぜひご覧ください。

2. ローマ日本文化会館に求められた「日本」 - その建物と庭について

ところで、1962 年のローマ日本文化会館に求められた「日本」、「日本らしさ」とは、どのようなものだったのでしょうか。

ローマ日本文化会館の建物は吉田五十八、日本庭園は中島健の設計です。吉田五十八はもともと数寄屋造を得意とし、大磯の吉田茂邸や迎賓館などの設計で有名な建築家ですが、文化会館は平安時代の寝殿造風の壮麗な建物となりました。このしつらは当初から批判があり、岡部謙次郎は『芸術新潮』第4号（1962）で、「日本文化と称されるもの」の「おもて立つた浅薄さの一例」とこき下ろしていますし、最近では杉本博司が著書『空間感』（2011）で、「日本のすべてのデザイン・モジュールを1.5倍にするという逆手の戦法」が「スケールの狂い」を生じさせ、「吉田は和の空間の中に洋の空間を忍ばせる手法には、成功したのだが、洋の空間の本拠地、イタリアでの空間の中に和の空間を忍び込ませる試みは失敗に終わった」、と言っています。文化会館の内部空間はすべてにおいて大きく横に引き伸ばされ、「奇妙な違和感」（杉本）を与えていることは否めないと、私も思います。

ただし、これはイタリア側の要望を踏まえた結果でもありました。吉田自身によれば、設計にあたりイタリア政府からの「たゞ一つの注文」として、「『建物は、周囲とあまり不調和なものはご免蒙る。ことに、いま流行の超モダンに困る。周囲の環境に調和するような、日本的の建築をたてゝほしい』と云」われた経緯がありました。加えて「周囲にヴァレジュリア美術館初め、古いメモリアルな建物が多数点在している関係上、建物の高さは一二米以上は許可できないという通達があった」ので、高さに制限のある中で「こせつきのない建物になるように努力」する必要があった。さらに「現地における、将来のメンテナンスを慮り、数寄屋等の木造日本建築を一切さけて、コンクリート建築の椅子式とし、畳、紙はり障子等、日本の工人を要するようなものは、一切使用しないこととし」、日本人がいちいち出かけて世話をしなくてもよいサステイナブルなものにすべく随分苦労したようです。

そして個人的には、結果として日本文化会館はローマの「適切な」縮尺の景観として「ローマの風景」の一部になったと思います。エトルリア博物館とローマ国立近代美術館の左に連なる日本文化会館の、日本家屋特有のすっきりと横に長く伸びる水平な直線は、曲線の多いヴァレ・ジュリアの景観に溶け込みつつも、「日本」をはっきりと表現する心地よい視線のゆらぎを私たちに与え、落ち着きのある静謐な風景を浮かび上がらせています。

（庭園について）

日本庭園についても、興味深いエピソードがあります。

庭の作者である中島健（1914～2000）は花を多用し、自然な風景を取り入れた美しく華やかな日本庭園を、国内外で数多く設計した「花の造園家」として有名です。ローマ日本文化会館の庭は中島が海外で最初に作った作品ですが、その制作のプロセスで中島は、まさに「花」のインスピレーションを得たのでした。以下のように述懐しています。

「花を庭に使ってみたいと思ったのは、昭和 37 年にローマ日本文化会館の庭を作るためにヨーロッパに行ったことがきっかけです。ちょうど 47 歳で、独立して 5 年目を迎え、海外で庭作りをするのも初めてでした。これを境に、庭に対する考え方が大きくかわったと思います。ローマに 1 年近く滞在して、人々の暮らしや文化に触れ、花のある生活や花を使った庭の美しさ、楽しさ、明るさなどを目の当たりにして、自分の庭にもどうにかしてこの豊かな色彩を取り入れられないかと思うようになりました」

吉田の寝殿造風の壮麗な建物に寄り添う形で、中島の庭にも「日本的なもの」が強く求められたことでしょう。吉田が、日本政府が、イタリア政府が求めたであろう「日本らしさ」とは、「伝統的な様式にのっとりた『ホンモノ』の日本庭園」だったと思います。しかし予算はもともと少ないので材料は（燈籠を除いて）すべて現地調達、大量の石組の石を求めて中島はたびたびトスカーナの奥地に行っていたそうです。中学からフランス語を学び、造園学、景觀学という新しい専門分野を学んだ中島が、その鋭敏な感覚で 1 年間にわたり、生命があふれ出すような季節の変化やトスカーナの美しい風景を目の当たりにし、「中島らしさ」のインスピレーションを得ました。ローマの風景と「花のある暮らし」に目を開かれた中島は、帰国後に自らの「日本庭園」にヨーロッパの花の風景を描き込み、軽井沢の啓愛社庭園や広尾のガーデンテラス？などの代表作を次々と作り、花の造園家としての地位を確固たるものにします。海外での日本庭園造園も 20 作品近くにのぼり、その最後の海外作品としてローマ大学付属植物園の日本庭園を造るのです。亡くなる 6 年前、日本文化会館の庭を造ってから 30 年後のことでした。

3. 日伊交流にとっての 80 年代、そしてその後の現在に至る発展と変化

さまざまな歴史の絡み合いの中で「日本」文化会館がイタリアに作られ、「イタリアの」風景として定着し、「文化交流の仕掛け、翻訳装置」としての役割を与えられたことをご紹介します。そのプロセスで、中島健がイタリアの「風景」に触発され、自らが作り出す「日本」そのものが変化し発展していった「化学反応」についてもご紹介しました。ここからは、主に 80 年代以降の日伊文化交流について、

駆け足で見えていきましょう。

1972年に国際交流基金が設置され、80年代はまさに日欧・日伊交流が深まり「文化の翻訳」が本格化した時代でした。例示だけでも、AISTUGIA 設立(73)、AIDULG 設立(88)、日本語能力試験の開始(84、イタリアは86年から)、日本語学習者の多様化と増加に伴う基礎日本語学習辞典や各種教材の制作、89年の海外日本語教師養成のための日本語国際センターの設置などが挙げられます。芸術交流分野でも、イタリアにおける近代日本画展・近代日本洋画展・具体展・包む展、フランスにおける唐招提寺展やジャポニズム展・前衛芸術の日本展、英国のからくり人形展や大江戸展など、さまざまな切り口と幅広い時代の「日本」が「初めて」(あるいは「改めて、新たな視点から」)紹介されました。舞踏や和太鼓、宝塚歌劇団などの初の海外公演もこの時期です。人物交流でも、74年から90年までに、アンドレ・マルロー、クロード・レヴィ＝ストロース、アンドレ・シャステル、エルンスト・ゴンブリッジ、アルベルト・モラビア、ウンベルト・エーコ、カズオ・イシグロなどが続々と日本に招待され、日本と「はじめて」出会いました。また、86年にはフォスコ・マラーニが国際交流基金賞を受賞。87年は日文研の設置・「徳川法制史」出版など日本研究の重要な節目であるとともに、JETプログラムが発足、日本国内の地域国際交流が活性化し、「地方交流の時代」の幕開けともなった年でした。89年にはベルギーでヨーロッパ以外の初めての国として日本がテーマ国となった「ユーロパリア・ジャパン」が開催され、90年にはメセナ協議会や日本芸術振興会が設立され、企業貢献や芸術支援の議論が多くなされた時期でもありました。

90年代以降は、ヨーロッパがさまざまな形で出会った「日本」が定着していく「安定した発展期」であるとともに、世界共通の課題としてのグローバルな課題への「協働」しての取り組みに目が向けられていきます。世界遺産条約が締結され(92)、人類共通の財産としての文化、その多様性の尊重が盛んに議論されました。芸術分野では94年、日本では実現不可能とされた三大芸能共同公演「俊寛」がウィーン、プラハ、ロンドンで実現しました。96年のパリの興福寺展や97年の「楽展」はヨーロッパでの実現・成功を日本に持ち帰り、凱旋帰国展が実現しています。山海塾や大駱駝艦などの舞踏が日本でブームになったのも、まずは欧州公演での成功があったのものでした。その意味で90年代は、「日本より先に」欧州が評価した「日本」があとからフィードバックされ、日本において再評価されてブームとなる、という現象も目立ちました。

そして現在に至るまで、このシンポジウムで議論されているようなさまざまな発展があるわけですが、総じて言えば、日本とイタリアについては「お互いが相手の国と文化を愛し、尊重している」という幸福な関係が続いていると思います。1年間イタリアに住んで、その恵まれた環境と一般市民の知的好奇心の高さをしみじみ感じています。こうした環境の醸成と発展は、欧州の長年にわたる日本研究の発展、その中で育ってきた優秀な日本研究者たち、それらの人たちの日本に関する深い理解と翻訳あるいは言論活動としての質の高い活動の蓄積がなければ、到底生み出せません。「ホンモノであれば、質がよければ、そのまま提示してわかってもらえるはず」というのは間違いで、受け取る側が「わがこと」として納得できるような「受け取る側の論理構造」への配慮、つまり「ヨーロッパ仕様」「イタリア仕様」に「寄り添う」の文化の翻訳・流通のシステムが、文化交流においては不可欠であり、それは日伊双方の関係者の長年の「協働」の賜物です。度重なる震災やテロ、社会不安や格差の拡大という世界的な不安の中で、「寄り添う」システムはますます求められるようになっていくのではないのでしょうか。

2016年のヴェネチア・ビエンナーレ日本館の若い建築家たちは、「人とつながり、コミュニティを考える」ことを「現在の自分たちの、将来にわたる」課題として真摯にかつ「明るく前向きに」提示したことで、多くの人々の共感を得ました。同じ世界を生きる同時代人としての『共感・共鳴システム』を、なるべく時間差なく提示できるようにすることこそが、相互に「化学反応」を引き起こし、変化し、新たな価値を「自分たちのものとして一緒に」創造し継承していく、すなわち「日本という文化の景観のイタリアにおける創造的継承」を可能にするのだらうと思います。その化学反応の触媒、水先案内人としての役割が、ローマ日本文化会館にも求められていると思っています。